

第5章 穀物菜食実践タイプ別にみた環境意識の考察

5 - 1 穀物菜食実践タイプの分類

5 - 1 - 1 穀物菜食実践度によるグループ化の方法

前章よりアンケート回答者は『蒼玄』の中でも意識の高い集団であることが推測される。しかし、この回答者集団の要素をすべて同質のものとするのは難しい。そこで会員のグループ分けを行なうことによって、各グループの環境意識を比較しようと考えた。

「穀物菜食実践タイプ」分類に用いた質問項目

グループ分けの変数としては、以下のアンケート項目の回答を用いた。

- 1．商品（食品・台所用洗剤・シャンプー・歯磨き粉）の購入先（問： - 1）
- 2．穀物菜食の実践状況（問： - 2）
- 3．『蒼玄』への入会理由（問： - 4）
- 4．穀物菜食に求める理想（問： - 7）

アンケートの中から以上4つの質問を選択した理由は、まず、これらの質問の回答が会員の穀物菜食実践状況や穀物菜食に対する意識を明確に表すものであること。そして、この4つの質問によって表われる穀物菜食実践状況と、環境意識との間には関係性が存在すると予想されたためである。実際に実践状況に関する各々の質問を個別に環境意識に関する質問とクロスし、関係性がうまく表われたものを選定している。例えば、図5-1では、穀物菜食の実践状況が高いほど、自動車の運転を削減しているという傾向が表われている。また、要素3「『蒼玄』への入会理由」については、アンケートで用いた選択肢の中から、人による勧め以外の能動的理由のみを分類に用いている。

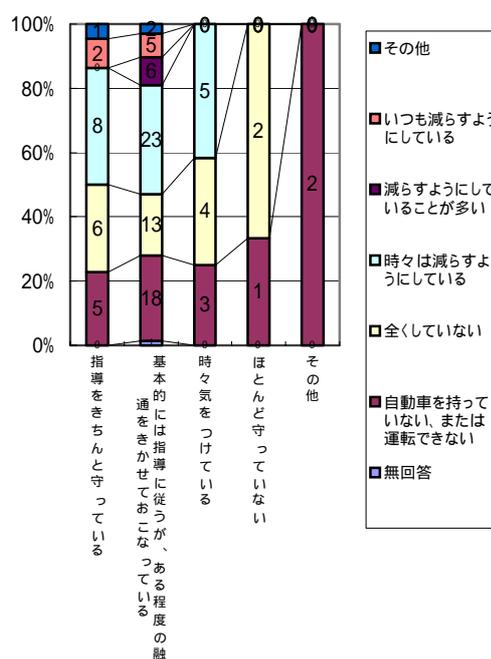


図5-1 穀物菜食の実践状況と自動車使用の削減

分類の方法

分析には「SPSS 9.0」for Windows」を用いた。また、数量化 類とクラスター分析を併用し、回答者のグループ分けを行なった。この理由は、数量化 類を用いることによ

って、分類されたグループの性質がより明確に表われたためである。手法として数量化類を用いた理由は、会員のグループ分けをアンケートの選択肢という質的データによって行なうためである。(数量化理論 類は質的データのパターンを分類する。)

- 1) 変数×ケースのデータを数量化理論 類によって、カテゴリーウエイトとサンプルスコアを求める。
- 2) 1で求めたサンプルスコアを用いて、類型化を行なう(クラスター分析)。分析上、個体と個体の類似度を表すためには平方ユークリッド距離、クラスター間の距離を決める方法として平均連結を採用した。
- 3) クラスター分析によって得たデンドログラムを、等しい類似度で区切りグループ化する。但し、ここで得られた一部の小グループについては、性質上ほかのグループに組み込めるものは組み込み、または同質の小グループ同士をまとめたため、クラスター分析によって得られた類似距離がすべて等しくはなっていない。
- 4) 各グループの特徴を読み取って、グループ名称を決定する。

分類過程の統計的結果

数量化 類では5軸を用いたが、この5軸の累積寄与率は37.4%と低い値であった。この理由として考えられるのは、分類に用いたアンケートの選択肢に、回答者の少ない選択肢が多く含まれていたためではなかろうか。具体的には、商品の購入先に対して「(その商品を)使用していない」という回答や、4つすべての質問において「その他」などが挙げられる。これら少数回答の選択によって、回答パターンが増大したため、分類に必要な軸数も多くなったと考えられる。またこれは、タイプ分けの結果母数5というグループが成立した理由でもある。このグループ(次項で述べる[唯我追求タイプ])の回答には、前述した少数回答がかなり多く含まれており、それ以外のタイプに統合することが意味的に不可能であった。そのため、母数5という統計的には非常に扱いにくい集団を、あえて残すことにした。

また、今回行なったタイプ分けの統計的确实性は低いが、タイプ分けを行なう過程でタイプ毎の性質が表われたため、本分類は意味あるものだと考える。読み取った各タイプの性質は次項で表5-1に示す。

5 - 1 - 2 穀物菜食実践タイプ別の概要

前項の方法によって求めたグループの特徴を判別し、以下のような5種類の穀物菜食実践タイプを定めた。

表 5-1 穀物菜食実践タイプ別の傾向

	商品の購入先	穀物菜食の実践状況	蒼玄の入会理由	穀物菜食に求める理想
熱心タイプ	全て『蒼玄』にて購入	しっかり行なっている(半数)・融通をきかせている(半数)	病気直し(ほぼ全員)・食に疑問(3分の1)	健康面かつ、健康な子孫を残すこと・『蒼玄エコ文化村』で暮らすこと
健康志向タイプ	全て自然食品店にて購入	融通をきかせて実践	病気直しのみ	安全な生活を送ること・最後まで健康に生きること(健康面のみ)
手抜きタイプ	食品は人それぞれ。シャンプー・洗剤・歯磨き粉は一般商店にて購入	融通をきかせて実践(半数)時々注意する(4分の1)	人それぞれ	健康面(ほぼ全員)・子孫の健康(3分の1強)・『蒼玄エコ文化村』の居住(4分の1)
適当タイプ	食品は人それぞれ。シャンプー・洗剤・歯磨き粉は生協にて購入	融通実践と時々注意が7:5	今回含めた主体的動機の回答は少ない	自身の健康面のみ
唯我追求タイプ	食品以外は、「その他」・「使っていない」が多い	融通実践が半数以上	以前から穀物菜食を実践(半数以上)	ほとんどが自由記述

1. 熱心タイプ(44人)

実践状況については、しっかり行っていると答えた人が半数と、融通をきかせていると答えた人が半数。しかし、すべての人が生活用品の購入先を『蒼玄』と答えており、『蒼玄』の指導に沿った実践状況は高い集団であると判断した。また、入会の動機はほとんど全員が病気の回復で、3分の1程度が食に疑問を感じたためと答えている。さらに理想については、選択肢(その他を含めて全部で6つ)のうち4項目に回答しており、それなりの動機と大きな理想を持って、熱心に取り組んでいる集団である。

2. 健康志向タイプ(28人)

生活用品は『蒼玄』以外の自然食品店(蒼玄で扱っている商品に比べて、純正という意味で質が低く、値段も安い商品を扱っている傾向がある)で購入し、融通をきかせて実践している集団。他と異なる点として、入会の動機が病気の回復のみであると同時に、理想も自分の健康面に関する2項目にとどまっていることから、自身の健康のみにこだわっている集団である。

3. 手抜きタイプ(19人)

食品の購入先は人それぞれであるが、それ以外の生活用品(シャンプー・洗剤など)は一般商店にて購入している。これは低価格優先の結果であろう。また、実践状況は半数が

融通実践であり、4分の1が時々注意するという程度である。しかし理想については、自身の健康はもちろん、子孫の健康が3分の1強、『蒼玄エコ文化村』への居住が4分の1と、[熱心タイプ]に次いで高い。よってこの集団は、大きな理想は持っているが、そのための行動（指導の実践）が伴っていないため、[手抜きタイプ]と命名した。

4. 適当タイプ（12人）

食品の購入先は人それぞれで、それ以外の生活用品は生協にて購入している。実践状況は融通実践が7に対して、時々気をつけているのが5と、ここまでは3の[手抜きタイプ]に似ているが、理想が自身の健康にとどまっている点が[手抜きタイプ]とは異なる。さらに、[手抜きタイプ]は、同一ではないがそれぞれが主体的な動機を持っているのに対して、このグループは主体的な動機項目に答えていない（知人他の紹介のみによる会員が含まれている）ことから、『蒼玄』に求めるものが他に比べて小さく、体の調子が良いからなんとなく継続しているだけと考え、[適当タイプ]とした。

5. 唯我追求タイプ（5人）

ここは小集団で、菜食の理想が他のタイプとは大きく異なる点が特徴である。記述回答例を以下に挙げてみる。「生き生きと生きること。成長すること」(20代・女性)「自分にあった暮らしができること」(20代・女性)「穀物菜食ははじめは健康目的であったが、ずっと続けていく中で健康とか安全な生活という事だけでなく、その人のライフスタイル、物の価値観そして、生きるという事で深い関わりがあるものと分かってきました。(後略)」(40代・女性)これらより、穀物菜食を自分の生き方の一部としていることが伺える。さらに動機の点で、「以前から個人的に穀物菜食を実践していたため」という人が全体の半数以上であり、穀物菜食を始めるというのは個人的ライフスタイル追求の成果であると考え、[唯我追求タイプ]とした。

5-1-3 穀物菜食実践タイプと回答者の属性

前項で述べた穀物菜食実践タイプを元に、ここでは穀物菜食の実践と、属性（性別・年齢・職業・居住環境・家族構成）との関係性について見ていく。

性別

性別と穀物菜食実践度との関係性はほとんど見られなかった(図5-2)。強いて言うならば、[唯我追求タイプ]はすべて女性ということであり、女性の方が人生やライフスタイル

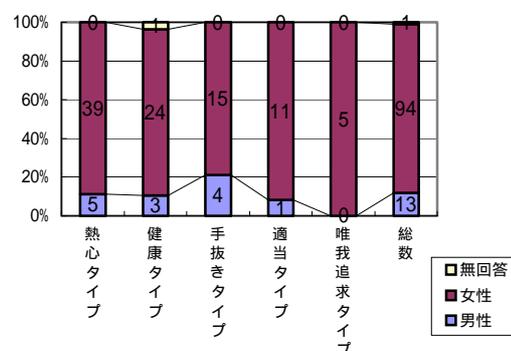


図 5-2 穀物菜食実践タイプと性別

について考えている時間が多いということになる。

年代

年齢層と穀物菜食実践度には、やや関係性が表われた(図 5-3)。総数での割合を比較対象とすると、[熱心タイプ]のグラフはそれに近い形をしているため、すべての年齢層にまんべんなく存在していると言える。次の[健康志向タイプ]は、年齢層がやや高めになっているが、これは年齢と共に健康志向が高まっていくことの表われだろう。[手抜きタイプ]には50代、60代の中年層が多く、[適当タイプ]については50代が半数弱を占めている。これは、そろそろ自分の健康状態が気になってくる年頃なので、試しに食生活にも気を配ってみるという程度の会員が多いためではないだろうか。この中には次期[健康志向タイプ]候補が混じっているに違いない。逆に[唯我追求タイプ]は50代以下で構成されており、高齢による健康配慮とは直接的な関係がないと考えられる。特に他のタイプと比較して[唯我追求タイプ]は20代の割合が高く、若いうちからライフスタイルに関心を持っていることが分かる。

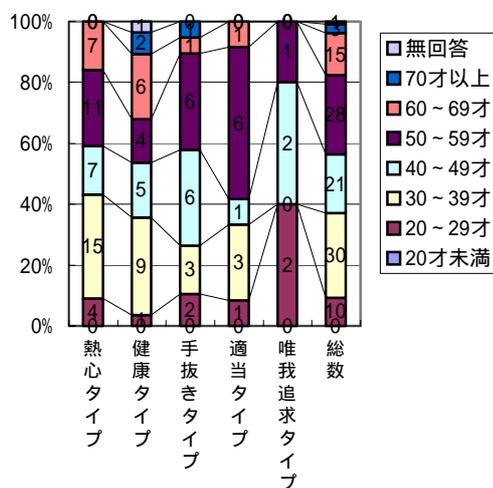


図 5-3 年齢と穀物菜食実践タイプ

職業

職業に関しては、[適当タイプ]とその他のタイプとの間に大きな差異が表われた(図 5-4)。[適当タイプ]は主婦やサラリーマン他で構成されており、自営業者や退職者は全く属さない事が分かる。すなわち、自営業者や高齢者の中に、穀物菜食をなんとなく続ける人はいないという事になる。また、[熱心タイプ]にはまんべんなく職業が分布している。そして、[熱心タイプ]より右の[健康志向タイプ]、[手抜きタイプ]になるにつれて自営業を除く労働者の割合が減り、退職者(高齢者)や自営業の割合が増加している。[健康志向タイプ]に退職者が多いのは、先述した年齢との関係で分かっているが、一方の[手抜きタイプ]に自営業者が多い理由を次のように考えた。

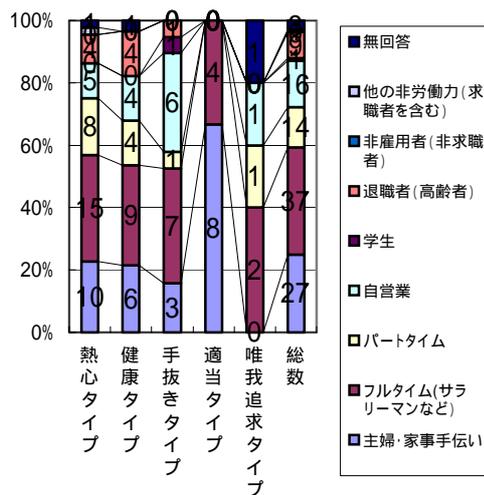


図 5-4 職業と穀物菜食実践タイプ

まず自営業の中には、農業生産や個人店舗経営があるが、それらは自分の職業を通じて商品を購入することが可能である。その商品が食料品であるならば、それは『蒼玄』が薦める食材（自然食品・純正食品など）ではない可能性が高く、食事が徹底しない場合が多いのではないだろうか。わざわざ購入するとなれば、食品を選択するのかもしれないが、手に入った食料品を拒否し、新たに購入してまで食材にこだわるのは容易なことではないためである。また、[適当タイプ]は主婦が6割、残りの4割をフルタイムが占めている。これは台所を預かる家庭の主婦で、とりあえず健康に良さそうだからと考えて取り組んでいる人が多いのではないだろうか。逆に[唯我追求タイプ]に主婦が含まれていないのは、このタイプには社会を疑問視しているところがあるため、家庭で過ごす主婦よりも、社会に出て働いている人の方が当てはまりやすいためであると考えられる。

居住環境

このクロス結果は、²検定で1%の有意であったため、居住環境と穀物菜食実践タイプの間にはなんらかの関係がある可能性が高い。グラフを見て分かるように、[熱心タイプ]と[手抜きタイプ]、また[健康志向タイプ]と[適当タイプ]にほとんど同じ傾向が表われた（図 5-5）。まず、[熱心タイプ]と[手抜きタイプ]は、大都市郊外よりも地方中小都市に偏っている。この2つのタイプの共通点は、『蒼玄』に対する理想の大きさであるので、地方中小都市で暮らしている人々は大都市郊外に住んでいる人よりも、高い理想を持って実践していることになる。

一方、[健康志向タイプ]と[適当タイプ]の方は、大都市郊外が6割弱を占めており、大都市郊外に住んでいる人々は、主に健康のためだけに実践している傾向があると言える。これらの理由として考えられるのは、大都市と地方都市の情報量の違いではなかろうか。まず、都会には自然食団体も数多く存在しているため、『蒼玄』もその中の1つにすぎないのに対して、地方では『蒼玄』が唯一とまではいかなくとも、珍しい存在であるに違いない。また、健康ということに関する情報も、都会の方が明らかに多い。つまり、都会にいと多くの情報の中に埋もれてしまう可能性があるのに対して、地方にいれば一つの考え方にじっくり入り込めるのではないだろうか。[唯我追求タイプ]に農山村の一軒家が多いのも、情報量の少ない農山村で、自分の生き方を見つめた結果であると考えられる。

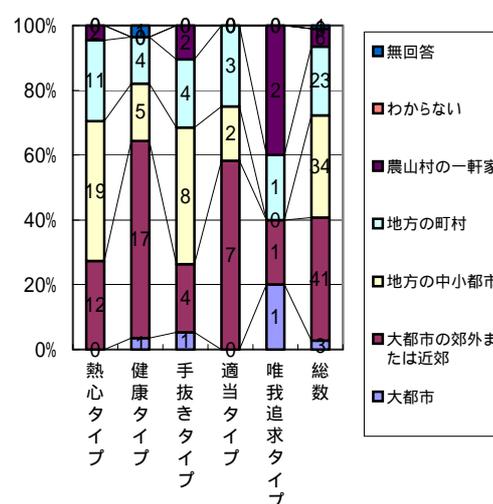


図 5-5 居住環境と穀物菜食実践タイプ

家族構成

『蒼玄』の会員登録は、家族単位ではなく、個人単位で行っている。よって、会員登録の様子を見れば、その家庭の取り組み具合が分かる(図 5-6)。最も熱心に取り組んでいるのは、家族全員で会員登録をしている形態であるが、グラフでは[熱心タイプ]から[適当タイプ]へと右肩下がりになっている。すなわち、[熱心タイプ]は家族が一団となって取り組んでいると言える。逆に右肩上がりになっているのは家族の中で本人のみが会員登録をしている形態である。アンケートの自由記述で「家族の理解が得られない」という回答があったが、家族内で食事に対する考え方が一致していなければ、取り組みも甘くなってしまう。そのため、実践タイプの的に劣った集団に多く見られる形となった。[唯我追求タイプ]については、一人でも十分に組み合っているようである。このクロス結果も、²検定で1%有意であったため、家族構成と穀物菜食実践タイプとの関係は無関係ではない。

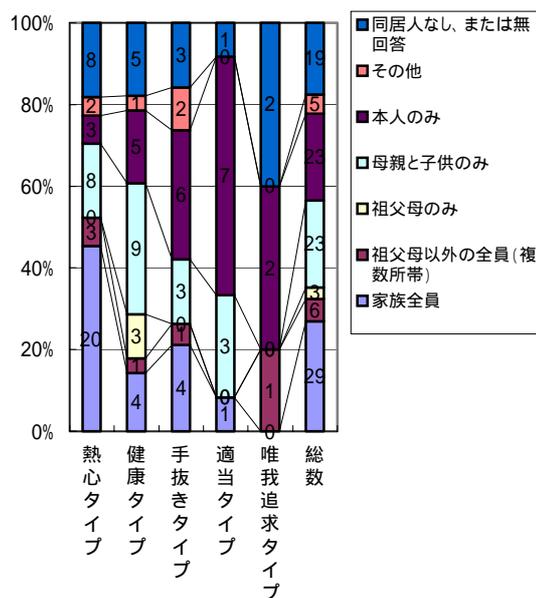


図 5-6 家族構成と穀物菜食実践タイプ

5 - 2 穀物菜食実践タイプ別にみた環境意識

5 - 2 - 1 地球環境問題に対する意識

(1) 回答者全体

回答者の9割近くが地球環境問題を重要と考えており、既存類似調査結果(日本又は福岡・久留米を対象に調査した環境意識調査)に比べて地球環境問題に対する関心はかなり高い(図 5-7)。分野別では、農薬汚染、地球の温暖化、ゴミ問題・資源リサイクル、オゾン層の破壊の順に関心が集まっている。特に農薬汚染についてはすべての会員タイプに共通して関心が高い。また、福岡・久留米の調査結果と比較してみると、オゾン層の破壊よりも地球温暖化に関心が偏っており(図 5-7)、これは地球温暖化問題が最近ますます身に迫った問題として感じられること(気象の変化や、頻繁にメディアで取り上げられていること)が影響していると考えられる。

(2) 熱心タイプ

アンケート回答者全体に占める、このタイプの所属割合が最も高い(44/108人)ため、回答分布は基本的に蒼玄全体と似たような形になっている。しかし、地球環境問題を重要ととらえる人が多く(図5-7)また、問題分野別では、砂漠化と答えた人がこのタイプのみであり(図5-8)地球環境問題に対する興味対象が広いことが分かる。

(2) 健康志向タイプ

分野別に見て、海洋汚染の割合の高さが目立つ(図5-8)。類似項目として、川・湖の水質汚濁にも関心が集まっていることから、水の汚染というものに危機感を持っていると考えられる。

(3) 手抜きタイプ

地球環境問題への関心は低く(図5-7)項目別でも特に大きな特徴は表われなかった。

(4) 適当タイプ

図5-7では、有効回答はすべて地球環境問題を最も重要な問題と認識している。項目別では、ゴミ問題・資源リサイクルに関心が高い(図5-8)。

(5) 唯我追求タイプ

図5-7を見るとこのタイプの環境意識は一見低いように見える。関心のある項目は、温暖化とゴミ問題(図5-8)。

(6) まとめ

地球環境問題の重要性を強く感じて

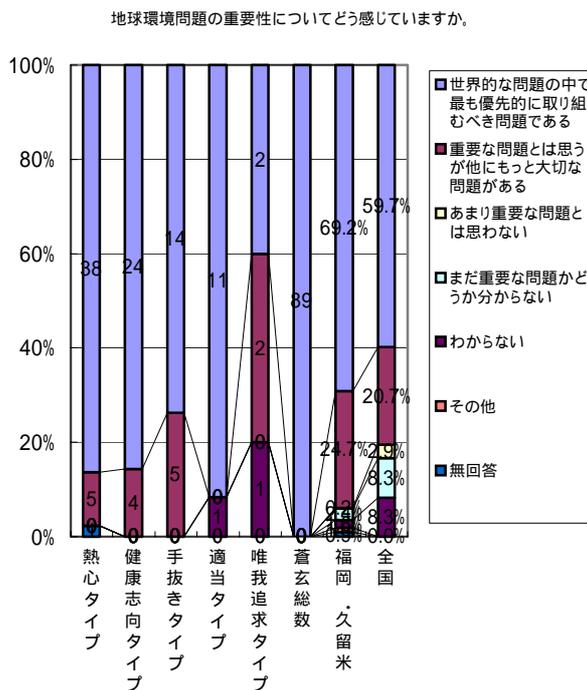


図5-7 穀物菜食実践タイプ別にみた地球環境問題の重要性に対する認識

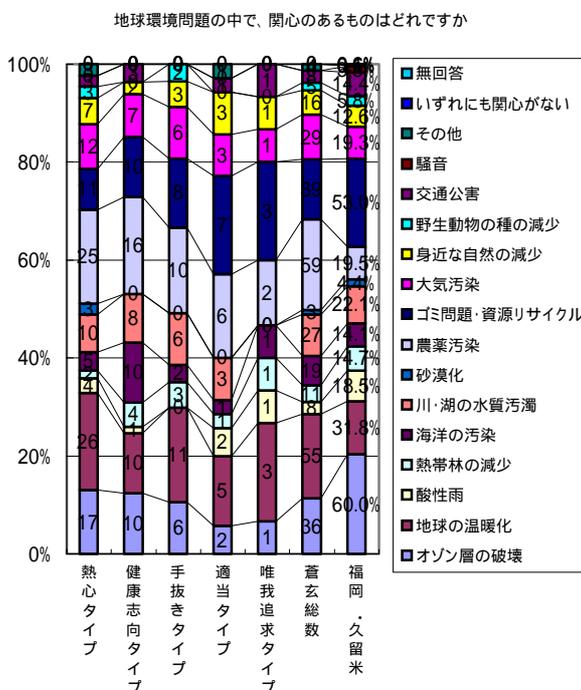


図5-8 穀物菜食実践タイプ別にみた問題分野別の関心度

いるのは、[適当タイプ]、[唯我追求タイプ]であり、その次は、[熱心タイプ]、[健康志向タイプ]、[手抜きタイプ]の順で、最後の3つは穀物菜食実践度と相関している（図 5-7）。これについては²検定で5%の有意性が認められたため、穀物菜食実践タイプと地球環境問題の重要性の認識は無関係ではないと証明された。また、地球環境問題の分野別関心度については、各タイプにおける関心の高い問題が、そのタイプの特徴を反映している傾向が感じられる（図 5-8）。

5 - 2 - 2 地域環境への負担意識と環境配慮行動の意志に対する意識

（1）回答者全体

地球環境への負担意識はやや高く（図 5-9）、生活水準を下げる意志も高い（図 5-10）。環境配慮商品の購入に対しては、日常生活における必需品の順（食品、住宅、日用品・雑貨品、冷蔵庫）に環境配慮商品の購入意志が高い（図 5-11～図 5-14）。

（2）熱心タイプ

環境への負担意識（図 5-9）も生活水準の低下許容度（図 5-10）も、回答者の中で平均に位置している。環境配慮商品の購入意志は、食品に対しては特に高く、その他には日用品・雑貨品についての購入意志も高い（図 5-11・図 5-14）。

（3）健康志向タイプ

このタイプも環境への負担意識については、[熱心タイプ]と同様に平均的な分布をしているが（図 5-9）、生活水準を下げる意欲の高さが特徴的である（図 5-10）。

（4）手抜きタイプ

すべての項目において、このタイプが最も意識が低いという結果になった。

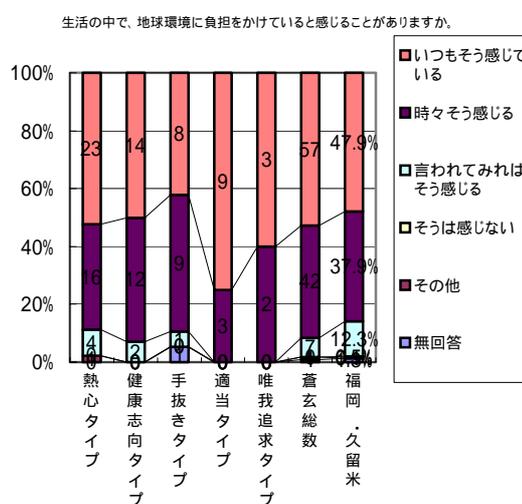


図 5-9 穀物菜食実践タイプ別にみた環境への負担意識

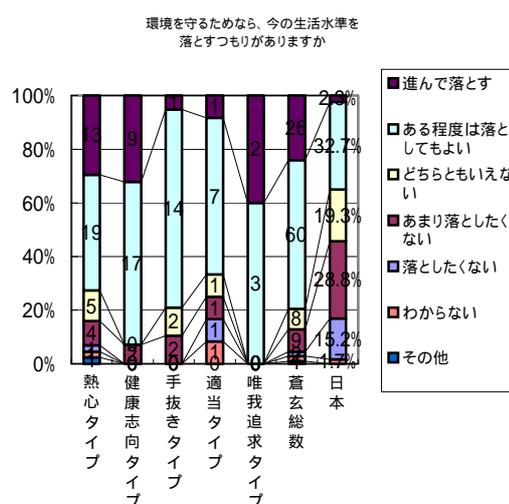


図 5-10 穀物菜食実践タイプ別にみた生活水準の低下許容度

(5) 適当タイプ

環境への負担意識を最も感じているのが、このタイプである(図 5-9)。しかし、それ以外の環境配慮行動への意欲は決して高くはなく、むしろ平均よりも意欲は低いと言える。

(6) 唯我追求タイプ

環境への負担意識が高く(図 5-9)、生活水準を落とす意志も高い(図 5-10)。また、商品の購入意欲も高く、特に生活に関わるもの(図 5-12 の住宅や、図 5-14 の日用品・雑貨品など)についての意欲の高さが目立つ。

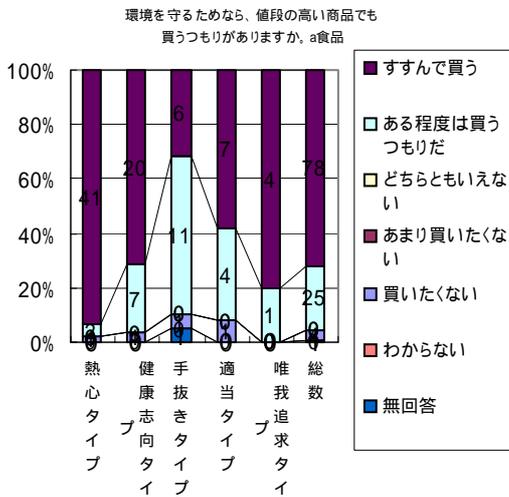


図 5-11 穀物菜食実践タイプ別にみた環境配慮型商品(食品)の選択

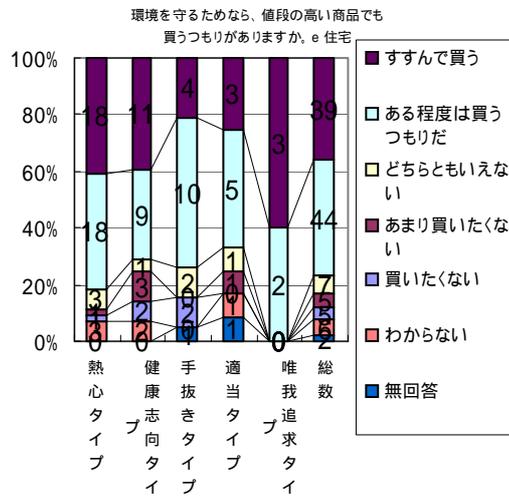


図 5-12 穀物菜食実践タイプ別にみた環境配慮型商品(住宅)の選択

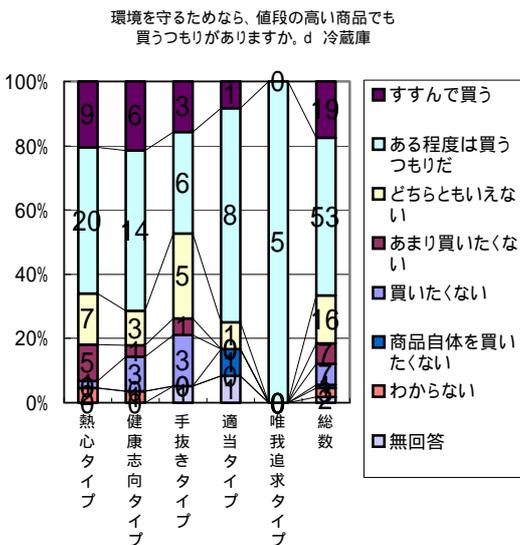


図 5-13 穀物菜食実践タイプ別にみた環境配慮型商品(冷蔵庫)の選択

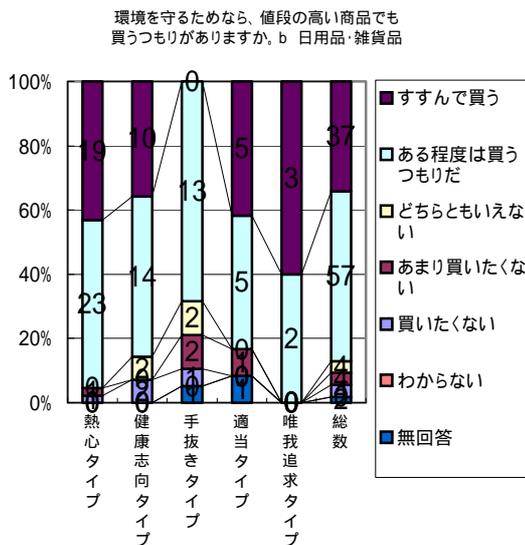


図 5-14 穀物菜食実践タイプ別にみた環境配慮型商品(日用品・雑貨品)の選択

(7) まとめ

環境への負担意識は、[適当タイプ] [唯我追求タイプ] の順に高く、その次は、[熱心タイプ] [健康志向タイプ] [手抜きタイプ] の順で、環境問題の重要性に対する認識 (図 5-6) と同様、この 3 つは穀物菜食実践度と相関していると言えよう。

5 - 2 - 3 自然観

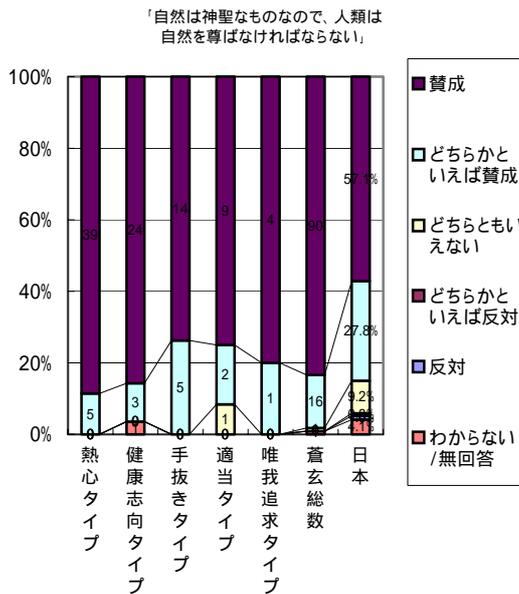


図 5 - 15 穀物菜食実践度別にみた自然尊重論の賛否

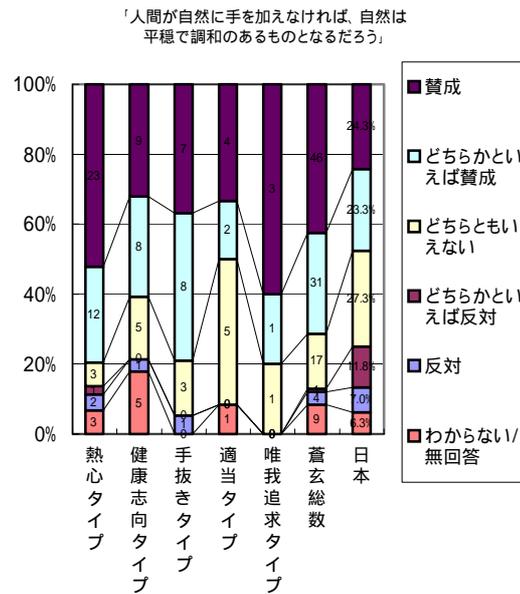


図 5 - 16 穀物菜食実践度別にみた人間による自然不調和論の賛否

(1) 回答者全体

両質問共に、日本のデータに比べて賛成側に偏っている。特に図 5-15 の自然尊重的な考えに対する賛成が 8 割以上、反対側はゼロと、すべてに近い回答者が自然を神聖とし、尊んでいることが分かる。一方、人間による自然不調和についても、賛成側 (「賛成」 または 「どちらかといえば賛成」) が 7 割を占め (図 5-16) あるがままの自然を良しとしていることが分かる。

(2) 熱心タイプ

自然尊重に賛成する人は全体の 9 割で (図 5-15) また人間の手が自然の調和を乱すと考える人も 8 割を占める (図 5-16) 。よって、崇拝的な自然観が定着している集団であると言える。

(3) 健康志向タイプ

自然尊重の賛成者は9割を占めるのに対して(図 5-15)、人の手に関わる問題に賛成する人は少ない(図 5-16)。

(4) 手抜きタイプ

自然尊重論については、5タイプの中で最も賛成者の割合が少ない(図 5-15)。しかし、人間による自然不調和論については、[熱心タイプ]に並んで賛成者(「賛成」または「どちらかといえば賛成」)の割合が大きい(図 5-16)。ただし、賛成の強さの点では[熱心タイプ]には劣る。

(5) 適当タイプ

人間による自然不調和論において、「どちらともいえない」という回答が最も多く、また、賛成率も各タイプの中では最も少ない(図 5-15)。よって、自然に対してそっとしておくという考えはあまりないようである。

(6) 唯我追求タイプ

人間による自然不調和論に対する賛成率が、タイプ間比較で最も高い(図 5-16)。

(7) まとめ

まず、自然尊重論への賛成率が高いタイプは、[熱心タイプ]と[健康志向タイプ]の2つであった。この2つのタイプに共通するのは、穀物菜食をきちんと実践していることである。すなわち、穀物菜食実践度の高い人ほど自然を尊んでいるということになる。また、人間による自然不調和論については、[熱心タイプ] [手抜きタイプ] [唯我追求タイプ]の賛成率が高いが、これら(特に[熱心タイプ]と[健康志向タイプ])に共通するのは、穀物菜食に求める理想の高さである。よって、穀物菜食に高い理想を持っている人が、人間によって自然の調和が乱れると考えていることになる。

5 - 2 - 4 生活行動の実態

(1) 回答者全体

まず、食品購入時には商品の選別を強く心がけていることが分かる(図 5-17)。また、図 5-18 からは非肉食の様子分かる。但し、ここでは倫理的・環境保全を理由として聞いているので、健康目的の非肉食は含まれていない。また、食事とは直接関係のない項目として自動車の運転についても、削減の努力をしている様子が伺える(図 5-19)。

(2) 熱心タイプ

食事に関する質問(図 5-17、図 5-18)に対する行動実践率が特に高い。また、自動車の使用を削減している人の割合は、削減の程度を無視するとそれほど大きくはない(図 5-19)。しかし、どの程度削減努力をしているかを見ると、「いつも減らすようにしている」「減らすようにしていることが多い」という高い削減努力を示す選択肢を選んだ人の割合が大きく、自動車の積極的削減を実践している人が多い。

(3) 健康志向タイプ

食事に関する項目では、ちょうど回答者の平均に位置している(図 5-17、図 5-18)。また他のタイプと比較して、自動車の運転を「いつも減らしている」という人が多い反面、減らす行動を見せている人(「全くしていない」以外)全部の割合は大きくない(図 5-19)。よって削減努力をしている人の中では、積極的削減を実行できている人が多い集団である。

(4) 手抜きタイプ

食生活に関しても、自動車の運転に関しても、心がけは小さい。

(5) 適当タイプ

このタイプは他のタイプとは異なり、食事に関する項目の心がけは大きくない(図 5-16、図 5-17)が、自動車の運転削減の心がけのみは大きい(図 5-18)。しかし、「時々減らすようにしている」という人のみであり、「いつも減らす」「減らすようにしていることが多い」という人は一人もいない。つまり、意志を実行に移せていないという

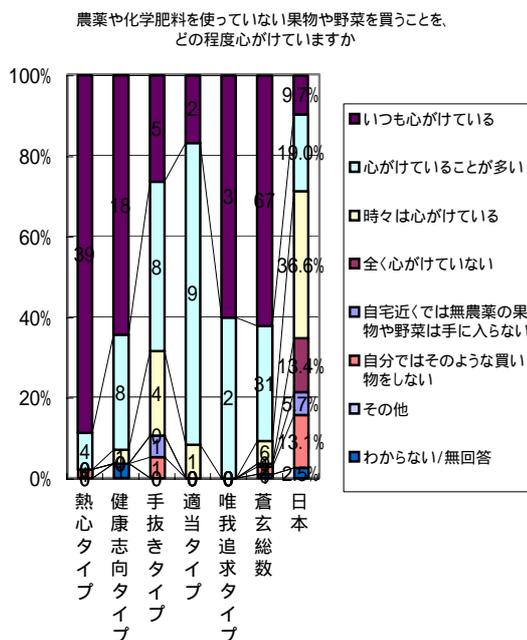


図 5-17 穀物菜食実践タイプ別にみた食品購入時の選択

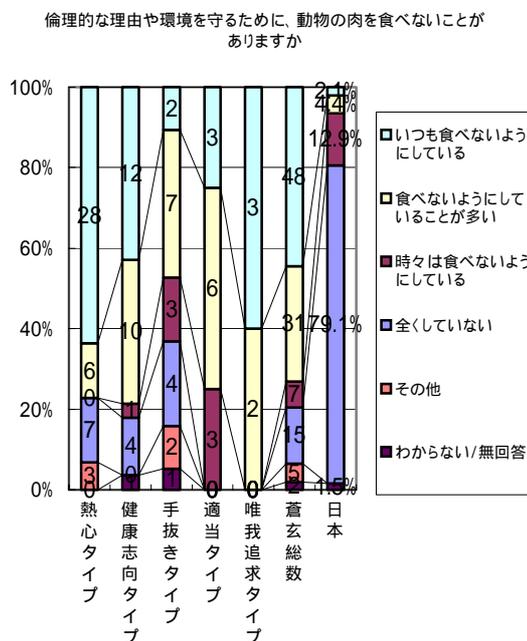


図 5-18 穀物菜食実践タイプ別にみた肉食の抑制

ことが分かる。

(6) 唯我追求タイプ

すべての項目で心がけは大きく、生活事項に関する心がけは大きい。

(7) まとめ

食事に関する項目(図 5-17、図 5-18)において、心がけが強いのは[熱心タイプ]、[健康志向タイプ]と[唯我追求タイプ]である。この2つの設問については、²検定の結果1%の有意であったため、穀物菜食実践タイプと、食に対する配慮は無関係ではない。これらに共通するのは穀物菜食のきちんとした実践であるため、穀物菜食を実践している人ほど、食生活に関する環境配慮行動も実践していることになる。

一方、自動車の使用削減(図 5-19)について見ると、心がけている人の割合が多いのは[適当タイプ]、[唯我追求タイプ]、[熱心タイプ]、[健康志向タイプ]、[手抜きタイプ]の順であり、最後の3タイプの順番は穀物菜食実践状況の順番と一致している。よって、自動車の使用削減という、食生活とは直接関係がない行動についても、穀物菜食の実践状況が影響していることが分かる。さらに、削減の努力をしている人の中でも、積極的に行動に移せているのは、[健康志向タイプ] [熱心タイプ]の2つである。この2つは穀物菜食実践度の高いタイプであるので、穀物菜食を実践している人ほど、削減しようという意識を実際に行動に移せるということが言える。

5 - 3 まとめ

5 - 3 - 1 穀物菜食実践タイプ別考察

(1) 回答者全体

既存の環境意識調査の結果と比較して、特に食事に関する質問の回答に大きな差が出るのは、団体の活動の中心が食事指導であることから考えると当然の結果である。例えば、環境配慮型商品(食品)の選択や、食品購入時の選択、肉食の抑制状況は、食生活を直接反映する質問であり、これらにおいて既存データと大きな差異が表われた(図 5-11、図 5-17、図 5-18)のは、背景として食生活の違いがあるためである。

環境を守るために、自動車の運転を減らすことがありますか

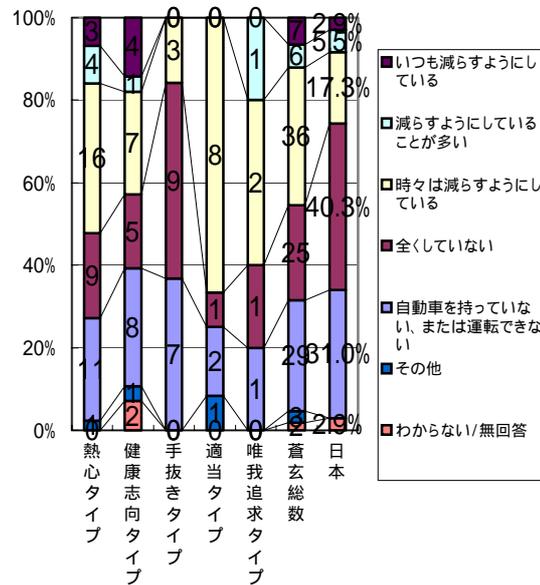


図 5-19 穀物菜食実践タイプ別に見た自動車の使用削減

しかし、食事に直接関係しない質問においても『蒼玄』の回答者の環境意識は高いと言える。すなわち、環境問題全般に関して意識の高い集団であると言えよう。全体の傾向として、自然を大切にすることをもち、生活水準の低下に抵抗を感じないことから、便利な生活に固執していないことが分かった。

ところで、「穀物菜食を続けていると、自分も自然環境の一部であることが分かってくる」¹⁾という言葉がある。これは『蒼玄』のパンフレットに載っている言葉であるが、アンケートの自由記述を見ると、実際多くの会員が同じことを感じていた。その一部を以下に挙げる。「自分の場合、地球環境を考えてというよりも、自分の身心の向上の為に穀物菜食と半断食を続けています。まず身体が健康になり、精神が健康になり、感性が磨かれていく。おのずと悪い物や不自然なものには触れたくなくなり、美しい物や自然な物をいつのまにか欲し、選んでいる。結局はこんな一人一人の小さな変化が、大きな変化につながるのでしょうか。」(30代・女性)「穀物菜食は、はじめは健康目的であったが、ずっと続けていく中で健康とか安全な生活という事だけでなく、その人のライフスタイル、物の価値観、そして、生きるという事で深い関わりがあるものと分かってきました。奥の深いものです。(以下略)」(40代・女性) 以上のように、穀物菜食の実践によって、気づかないうちに自分と自然環境のつながりを認識する。そして、現在のライフスタイルのあり方に疑問を抱くことが、例えば、自動車の使用を削減する等の行動につながっていると考えられる。

(2) 熱心タイプ

食品の購入配慮が徹底していたり(図 5-11)、食事に関する配慮行動の実践率が高いのは(図 5-17、図 5-18)、食事配慮を徹底している会員であることから当然の結果である。しかし、環境を配慮した日用品・雑貨品の購入を拒否する人が少ないなど(図 5-14)、環境配慮行動の高さは食だけに限られてはいない。自動車の使用削減状況からは、環境配慮行動の意志を実行に移せていることが分かった(図 5-19)。また、5つのタイプの中で最も自然を尊重しようと考え(図 5-15)、地球環境問題に対して広い関心を持っている(図 5-8)ことから、自然を大切に考えていることが言える。この自然観は、食事指導をきちんと守っているところから生じていると考える。また、人間が自然の調和を乱すという考えを持っており(図 5-16)、これは穀物菜食に対する高い理想によるものと考察した。以上から、穀物菜食という食事スタイルを実践しており、また自然を大切に考えることが、地球環境問題、環境配慮行動につながっている人々であることが分かる。

(3) 健康志向タイプ

このタイプは、他のタイプより人間の生活行動の面での意識の高さが目立った。まず、生活水準の低下を受け入れる意志が強く(図 5-10)、自動車の運転を削減することに積極的な人が多い(図 5-19)。これは、穀物菜食をきちんと行っていることと無関係ではない

だろう。このタイプが穀物菜食により健康を求めるのは、病気の回復が理由であることが多い。例えば次の人は穀物菜食の理想として、「家族にあまり心配かけず救急病院にかけ込む事もなく普通の生活ができる事(自分自身で管理できる事)」(60代・女性)を挙げている。病気回復という大きな目的のための穀物菜食の実践が、自然と「自分が自然の一部」という意識の芽生えにつながる。このタイプの人、時間の経過と共に、自然を大切に感じて少しずつ行動に移していくのではないだろうか。ただ、[熱心タイプ]と異なるのは、穀物菜食への理想が自身の健康のみに止まっていることである。このため、自然を崇拜してはいるが(図 5-15) 人の手を入れることを否定出来ない(図 5-16)。つまり、自然と共存した生活まで望んでいないということである。また、このタイプに所属する会員の年齢層の高さ(図 5-3)から、これまでの時代の流れ、例えば高度経済成長で科学が人間に与えた恩恵などを無視することができないためであろう。

そして、地球環境問題の分野別関心度では、水に関する関心が高いことが分かった。水とは生命の源であり、良い水は健康維持にも欠かせないため、健康を考えるこのタイプで関心が高くなったと考える。

(4) 手抜きタイプ

環境問題の関心は薄く、ほとんどすべての項目において、意識の低さが浮き彫りになった。穀物菜食を十分に実践しないのは、現代食が捨て切れないことと、費用の問題のためであると考えれば、生活の利便性の追求や、値段の高い商品を買わないのは当然である。また、唯一意識が高かったのが自然観である。人間が自然の調和を乱しているという考え(図 5-16)は、『蒼玄エコ文化村』に興味を持っていることの裏付けであると考えられる。なぜならば、現在の生活が自然の調和を乱していると感じることが、自然と協調した生活、すなわち、人間と自然の共存を理想とする『蒼玄エコ文化村』の賛同につながるのではないだろうか。以上より、自然との共存に興味・関心を持ってはいるが、興味意識のみに止まっており、日常生活では利便性・経済性を優先する人々であると言える。

(5) 唯我追求タイプ

環境への負担意識(図 5-9)や、生活水準を落とす意志の高さ(図 5-10)は、このタイプの人達がライフスタイルを追求しているためである。同じ理由で、商品の購入意欲も高く、その中でも、特に生活に関わるもの(図 5-12 の住宅や、図 5-14 の日用品・雑貨品など)についての購入意欲が高い。そして、生活行動に関する心がけも大きい。また、人間が手を加えると自然が乱れるという考え方(図 5-16)は、ライフスタイル追求という点から推測すると、人間が自然と調和して生きていくべきだと考えているためではないだろうか。地球環境問題の重要性認識度(図 5-7)で、2番目の選択肢の中にある「他のもっと大切な問題」とは、人間の生き方・ライフスタイルであると推測できよう。人間の生き方・ライフスタイルも環境問題と無縁ではないので、単に環境意識が低いのではなく、問題意

識が環境問題という漠然としたものを超えて、より具体的なものになっているためではないか。

表 5-2 穀物菜食実践度と環境意識

	地球環境問題に対する意識	地域環境への負担意識と環境配慮行動の意志に対する意識	自然観	生活行動の実態
熱心タイプ	<ul style="list-style-type: none"> 地球環境問題を重要と捉える人が多い 地球環境問題の興味対象が広い 	<ul style="list-style-type: none"> 環境への負担意識も生活水準の低下許容度も、共に回答者の平均 環境に配慮した食品に対する購入意識が特に高い 	<ul style="list-style-type: none"> 9割が自然尊重論に賛成 8割が人間による自然不調和論に賛成 	<ul style="list-style-type: none"> 食事に関する実践行動率が特別に高い 自動車の運転は、積極的に削減している人が多い傾向
健康志向タイプ	<ul style="list-style-type: none"> 水の汚染に危機感を持っている 	<ul style="list-style-type: none"> 環境への負担意識も生活水準の低下許容度も、共に回答者の平均 生活水準を下げる意欲が高い 	<ul style="list-style-type: none"> 9割が自然尊重論に賛成 人間の手が自然の調和を乱すと考える人は平均以下 	<ul style="list-style-type: none"> 食事に関する実践行動は全回答者の平均に位置する 自動車の運転を積極的に削減している人の割合が大きい
手抜きタイプ	<ul style="list-style-type: none"> 地球環境問題への関心は低い 	<ul style="list-style-type: none"> すべての項目に対して意識が低い 	<ul style="list-style-type: none"> 自然尊重論の賛成割合は5タイプ中最も少ない 人間による自然不調和論の賛成割合は熱心タイプに次いで大きい 	<ul style="list-style-type: none"> 食事、自動車の運転削減共に心がけが小さい
適当タイプ	<ul style="list-style-type: none"> 回答したすべての人が地球環境問題を最も重要な問題として認識 ゴミ問題・資源リサイクルの関心が高い 	<ul style="list-style-type: none"> 環境への負担を5タイプの中で最も感じている 環境配慮行動への意欲は高くない 	<ul style="list-style-type: none"> 人間による自然不調和論の回答は「どちらともいえない」が最も多く、賛成率も少ない 	<ul style="list-style-type: none"> 食事に関する心がけは小さい 自動車運転削減の心がけは大きい、「時々減らすようにしている」という人のみ
唯我追求タイプ	<ul style="list-style-type: none"> 環境問題の重要度認識は5タイプ中最も低い 地球温暖化とゴミ問題の関心が高い 	<ul style="list-style-type: none"> 環境への負担意識、生活水準を落とす意志、共に高い 環境配慮商品の購入意欲も高い 	<ul style="list-style-type: none"> 人間による自然不調和論の賛成率が、5タイプ中最も高い 	<ul style="list-style-type: none"> すべての項目に関して、心がけは大きい

5 - 3 - 2 穀物菜食タイプと環境意識

今回のタイプ分けでは、穀物菜食に対する考え方を分類要素に用いたため、グループの特徴には純粋な食生活の実践度のみでなく、思想的なものも含まれている。そのため、[適当タイプ]、[唯我追求タイプ]の2つは他と多少性質が異なり、他と単純に比較することは難しい。[適当タイプ]は食事を変えることで環境意識が変化し、また、[唯我追求タイプ]については、食への疑問が最初にあったとは言い切れないためである。よって、まずは穀物菜食の実践度のみを比較軸にとって考察してみたい。

穀物菜食実践度は、タイプ名称でいうと、[熱心タイプ]、[健康志向タイプ]、[手抜きタイプ]の順に高いのであるが、同じ順番で環境意識も高いという傾向の結果が出ている。すなわち傾向として、穀物菜食を実践しているグループほど環境意識が高いということである。ただし、純粋な実践度という点では、[熱心タイプ]と[手抜きタイプ]のみが同一直線上に存在しているので、この2つのタイプのみを比較してみることにする。すると、すべての質問項目の回答分布が、実践度の低い[手抜きタイプ]よりも、実践度の高い[熱心タイプ]の方が意識・行動共に環境のために良いという結果を示しており、これは、穀物菜食実践度の高い人ほど、環境意識も高いことを証明している。

ただし、人間による自然不調和論の賛否(図 5-16)に関しては、[熱心タイプ]も[手抜きタイプ]も同じような回答分布になっている。この2つの共通点は、穀物菜食や『蒼玄』に対する理想の大きさであり、自然に手を加えることを心よく思わない点で、『蒼玄エコ文化村』の推進に通じているように思う。『蒼玄エコ文化村』は、自然と調和した暮らしを目指し、[熱心タイプ]・[手抜きタイプ]に属する人々はそこに期待を寄せているのではないか。それに対して[健康志向タイプ]は、食事の実践はしているが、求める理想が健康のみであり、その先の暮らし方までには至っていない。一方[健康志向タイプ]は、人間が自然の調和を乱しているとは考えておらず、これが『蒼玄エコ文化村』への無関心の理由となっているのではないだろうか。

また、ここで性質が異なると前述した2つのタイプについても考察を試みる。まず、[適当タイプ]については、多くの質問項目で環境意識の高さが目立った。しかし、確かに意識は高いが、環境配慮行動の実践にまでは至っていない。環境配慮行動の実践という点で見ると、[熱心タイプ]が最も高いため、穀物菜食の実践が環境配慮行動の実践につながっていると考えた。すなわち、[適当タイプ]が意識を行動に移す鍵も、穀物菜食の実践にあると考えられる。

最後に[唯我追求タイプ]は、ライフスタイルの追求が意識・行動の理由となっている。食生活ももちろんライフスタイルの一部であるので、指導された食事法もきちんと実践している。また、自分の生活を見直すという意味から、環境意識も環境配慮行動の心がけもたいへん大きい。

以上より、環境意識と穀物菜食実践状況の関係について、次のように言える。まず、穀

物菜食実践度の高い人ほど、環境意識が高いという傾向がある。そして特に、環境意識の向上から、実際の生活における環境配慮行動の実践へとつなげているのは、穀物菜食を熱心実践している人である。また、環境意識の向上を促すためには、自然に対して畏敬の念を持たなければならないが、ここにも穀物菜食の実践度が関係している。しかし、人間と自然との距離（人間が自然に手を入れることは良いのか）という点では、穀物菜食に対する理想像の持ち方が関係してくる。つまり、穀物菜食をいかに実践していても、理想を持っていなければ自然と共存する生活スタイルまでは受け入れることができない。よって、穀物菜食のきちんとした実践と、自然との調和という大きな理想の両方がそろって初めて、環境意識の向上・環境配慮行動の実践ができる。

引用文献

- 1) J A P A N 蒼玄 N B F : 食養ガイドブック , p.33 (1997)

